

石原莞爾を語るならば心しておきたい事

仲條立一

私がもし兄の墓碑銘を作るとすれば、「石原莞爾は大正 14 年（1925）『最終戦争論』を発表し、昭和 24 年（1949）に死ぬまでの彼の一切の思想・行動は、この歴史観に基づいていた」と書くだらうとは莞爾の実弟石原六郎（1904-1976）が語り、事実経済往来社刊行の『最終戦争論』（P192）に掲載されてある。

この処、石原莞爾に係わる現代史的視点より見た史実の解明が、多方面の角度からなされているが、この墓碑銘がそれらの疑問のすべてに答えてくれるものと私は思う。1993 年 1 月発行の『日米対決と石原莞爾』の著者マーク・R・ピーティアーは、その第 11 章結びの冒頭にこの言葉を掲げ、「石原の生涯と経歴を一言で最も包括的に説明したものとして、この飾り気のない要約は十分意を尽くしている」と述べている。（P231）。

この著者に対する評価は、人それぞれであろうが、ピーティアー氏の詳細な研究とその行動力については瞠目すべきものがある。その行動の一端を示すものとして、石原六郎氏の慰霊祭を昭和 52 年 1 月 16 日、協和会・新アジア連盟・地元有志一同が会して行った際、当時仙台市長だった島野武氏の弔辞がある。録音テープより関連ある箇所を読み起こすと、「・・・私が仙台市長に就任した昭和 33 年当時、仙台のアメリカ文化センターの館長をしていたピーティアーという米人が帰国後、学究に戻って発表した論文が石原莞爾であった。その後彼に会った時、ぜひ莞爾氏の弟六郎氏に会ってみては、とすすめると彼は（もう既に会っているいろいろ話しをした）とっておった。・・・」

ピーティアーがこの本の中で強調したのは、石原がときに臨んで、如何に大量の味方を作り得たかという事と、反面同調者が去って行ったときに、石原の力は脆くも瓦解し去ったと見ている。満州建国然り以後敗戦に至るまで、そして戦後もその見解は変わってないようだ。この事はいしわらの示した欧米霸道主義的観方そのものであるであろう。力がすべて、多数が少数に勝る優勝劣敗そのものであると判断する。いずれにしても石原莞爾という巨象は大き過ぎた。軍事学・社会学科学・宗教等いずれの切り口にも鮮血が張っている。世間の学者にとってはまたとない学究の対象であろうが、その本質を見事に描くのは頗る難事だと思う。今後石原莞爾を筆にする方々に、私なりに次のことだけはお伝えしたい。

(1) 石原莞爾は戦争は遠からず無くなるとは言ったが、最終戦争が無くなるという事は亡くなるまで文字にし言葉にしたことすらない。万物は生成発展してやがい死滅する。社会現象である戦争とて例外ではない。発達の極限に達すればやがい死滅するが、人智の及ばない一大決戦の後に戦争は死滅し、争いの無い永久平和が実現する。（最終戦争論に一貫して述

べてある。)

(2) 石原莞爾は、「私は日蓮聖人の信者として、聖人の予言を確信するものであり、この信仰を全国民に伝えたい熱望を持っている。しかし『最終戦争論』が決して宗教的説明を主とするものでないことは、少しく丁寧に読まれた人々には直ちに理解される事と信ずる。この論は私の軍事科学的考察を基礎とするもので、私の予言は政治史の大勢科学・産業の進歩とともに、私の軍事研究を傍証するために挙げた一例に過ぎない。・・・(前記『最終戦争論』P101)と言っている。私が直接伺った言葉としては、「君たちは若いんだから好きなように生きればよい。今ここで宗教の話をしてはわからない。君たちが仏様の予言と、予言された人日蓮聖人の霊さえ信ずれば、君たちが地獄の行いがあつたとしても皆救い上げられるんだ。私の慈悲とは廣大無辺なのだから・・・難しい経文等必要ありません」

(3) 昭和23年11月24日、西山の自宅で16ミリトーキーフィルムに収められた和田、木村武雄両氏との話の中で、「それがためには在来の西洋文明のような構想ではいけない。われわれは、ちょうどその逆に、都市解体・農工一体・簡素生活の方向にいかねなければならないと主張しているのであります。言い替えば、われわれの革命というものとは完全なるわれわれの生活態度の革命まで行かなければならない、とこう思う。繰り返して言えば、われわれの革命は、われわれの生活態度の革命であります。そこまで徹底して初めて、われわれは世界の最も優秀な民族たる誇りを完うすることができると思います。(『最終戦争論』P186-187)

(4) 昭和26年になって石原の遺品の中から東亜連盟同志会の「宣言」の改定案が、六郎氏によって発見されている。それには「人類歴史の最大関節たる世界最終戦争は十数年後に近迫し来たり。昭和維新とは東亜諸民族の全能力を総合運用して、(身に寸鉄を帯びず生活そのものの力によって、)この決勝戦に必勝を期することに外ならず・・・」()部分が加筆されたものである。前後の事情から察して昭和20年10月頃と六郎氏は推定している。(『最終戦争論』P182-183)

(5) 「老兵はただひたむきに大聖人のお示しを直接承って今日まで心身を君国に捧げて参りました。老兵の仕事は大体、敗戦の時に終わったので、顧みてまことに感激に耐えない一生でした。全く大聖人の無限のお慈悲によるものです。20年余の難病も老兵の仕事を少しも妨げる事はできませんでした。任務終って今はこの持病で静かに終わる日を待っています。大聖人のお側に馳せ参じる日が楽しみでございます」(『最終戦争論』P234)

この言葉はこの著書の結びに掲載されてあるのだが、この短い文面から多くの示唆と想像を膨らませる事が出来る。20年余の難病と自認しているところから推し量って、満州事変

以前に相当の自覚症状があったであろうと、これを耐えて時局に対処した強靱な意志と常人を超えた発想と決断。それらに共通する自らが研究・考察した『最終戦争論』に導かれた判断に誤りがないか？

大聖人のお示しを直接承って確信を持ち発表されたものとする。人間誰も自分の所信を世間に発表する場合、相応の覚悟を持つのは当然であるが、石原の場合は自らの信ずる神との対話で不退転の決心をもたれたのである。私は石原莞爾先生と多感な 17 才より 2 年余、西山農場でお教えを受けたが、その素晴らしい包容力は感激の一語に尽きる。最も神に近く最も人間的な温もりに溢れた方だった。

テイ婦人にも実に濃やかに面倒を見て頂いた思いがつかない。実弟六郎さんには、時宜に適したお話と兄莞爾將軍同様人情の何であるかを身に持って知らされた上、莞爾先生の適切な評伝をお聞きする事が出来た。無上の幸せであろう。その六郎さんの言われた言葉の中に「兄は兄を利用して一儲けしようとか、兄の名声を借りて世間にアピールしようとかの魂胆がある者には、木で鼻をくくるような挨拶しかなかった。が近在のお百姓さんなんかが見えたと、南瓜作りの先生とか、お米作りの先生とかと云って一生懸命話を聞いてあげたものだ」

過去現在を見据えて未来に及ぶ時、未来の分野は予言に属する。そして先生ご自身が「近い将来に最終戦争の来る事は私の確信である。最終戦争が主として東亜と米州との間に行われるであろうことは私の想像である。最終戦争が 30 年内外に起こるであろうという事は占いに過ぎない」（『最終戦争論』 P 24.25.34.36）と語っておられる。

將軍にお会いして、その人格に触れた方は將軍の信ずる日蓮教を信じ、將軍の思想・行動を宗教活動の一環として促え解釈するのは当然である。が私なりの考えでは、『最終戦争論』に述べられた時代に突入している現在は、最早先生の見通しが確実に進みつつあるかどうかにかかかっており、以後の半世紀を石原先生の言葉通りと信ずるものは、石原教の信者であろう。この論でゆけばかくいう私も石原教の信者と言える。

先生の実弟六郎氏は、常々「兄の事は兄自身が筆にした膨大な著作があるのだからそれを丹念に読めばおのずと真意が理解出来る」と語り巷の本は参考にはしても全幅の信をおいてなかった。